

目 次

学長挨拶.....	池端 雪浦 (東京外国語大学学長).....	1
言語運用を基盤とする言語情報学拠点.....	川口 裕司 (COE 拠点リーダー).....	3

Computer-Assisted Linguistics / Corpus Linguistics (2003. Dec. 13 Sat.)

招待講演

司会 在間 進

One or Two Phonemes: /ø/ - /u/ in Old French, /s/ - /z/ in Dutch and Frisian.

New Solutions to an Old Problem

Pieter van REENEN, Anke JONGKIND9

The Lexicon-Grammar of French Verbs: a syntactic database

Christian LECLÈRE.....29

招待講演

司会 高垣 敏博

Corpora of Spoken Spanish Language. The Representativeness Issue

Francisco MORENO-FERNÁNDEZ..... 49

Methods of "Hand-made" Corpus Linguistics - A Bilingual Database and the Programming of Analyzers -

Hiroto UEDA75

セッション : Computer-Assisted Linguistics / Corpus Linguistics

司会 馬場 彰

Multilateral Interpretation of Corpus-based Semantic Analysis - The Case of the German Verb of Movement *fahren* -

Yoshiyuki MUROI99

Tools for Creating Online Dictionaries Judeo-Spanish, A Case Study

Antonio RUIZ TINOCO.....113

A Formal Analysis of Spanish Adjective Position

Masami MIYAMOTO129

セッション : Computer-Assisted Linguistics / Corpus Linguistics

司会 富盛 伸夫

On the Language of Portuguese *Estoria do Muy Nobre Vespesiano*

-Linguistic Change and its Documental Evidence Based on the Corpus Study

Naotoshi KUROSAWA.....147

Analysing Texts in a Specific Domain with Local Grammars - The Case of Stock Exchange Market Reports Takuya NAKAMURA.....	159
Multivariate Analysis in Dialectology A Case Study of the Standardization in the Environs of Paris Kanetaka YARIMIZU, Yuji KAWAGUCHI, Masanori ICHIKAWA	183

Applied Linguistics (2003. Dec. 14 Sun.)

招待講演

司会 宇佐美 まゆみ

Socio-pragmatic Aspects of Workplace Talk

Janet HOLMES.....207

What Do We Mean by "second" in Second Language Acquisition

David BLOCK.....233

招待講演

司会 宇佐美 まゆみ

Integrating Applied Linguistics Research Outcome into Japanese Language
Pedagogy: a challenge in contrastive pragmatics

Suzuko NISHIHARA.....255

セッション : Applied Linguistics: discourse analysis and language teaching

司会 海野 多枝

Why Do We Need to Analyze Natural Conversation Data in Developing
Conversation Teaching Materials? - Some Implications for Developing TUFS
Language Modules -

Mayumi USAMI.....263

An Analysis of Teaching Materials Based on New Zealand English
Conversation in Natural Settings: implications for the development of
conversation teaching materials

Takashi SUZUKI, Koji MATSUMOTO, Mayumi USAMI.....279

『BTS による多言語話し言葉コーパス 日本語 2』の作成過程と整備の結果
から示されること 会話教育への示唆

関崎博紀、木林理恵、木山幸子、李恩美、施信余、宇佐美まゆみ.....301

TUFS 会話モジュールの日本語スキットと『BTS による多言語話し言葉
コーパス - 日本語 2』における依頼行動の対照研究 - 会話教育への示唆 -

謝韞、木山幸子、李恩美、施信余、木林理恵、宇佐美まゆみ.....323

セッション : Applied Linguistics: e-Learning / syllabus

司会 根岸 雅史

Computer Assisted Language Learning (CALL): moving into the networked future

Mark PETERSON.....345

Beyond the Novelty: providing meaning in CALL

Malcolm H. FIELD.....355

技能シラバスに基づいた発音練習

藤原愛、長沼君主、和田朋子、芝野耕司.....377

セッション : Applied Linguistics: TUFS Language Modules

司会 吉富 朝子

The Creation of the TUFS Pronunciation Module

Tsutomu KIGOSHI.....391

Development and Assessment of TUFS Dialogue Module -Multilingual and Functional Syllabus

Kentaro YUKI, Kazuya ABE, Chunchen LIN.....409

閉会の辞.....川口 裕司.....435

INDEX.....437

学長挨拶

池端雪浦（東京外国語大学学長）

2002年度から開始された文部科学省の「21世紀COEプログラム」は、我が国の大学に、世界最高水準の研究教育拠点（Center of Excellence）を学問分野毎に形成し、研究水準のいっそうの向上と世界をリードする創造的な人材の育成をめざしています。本学は、「人文科学」と「学際・複合・新領域」の2つの学問分野にそれぞれ1件の申請を行い、人文科学では「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」、学際・複合・新領域では「史資料ハブ地域文化研究拠点」が採択されるというすばらしい結果をえました。本学大学院地域文化研究科の、個性ある研究教育のポテンシャルが高く評価されたことを嬉しく思います。これら二つの拠点は、言語研究と地域文化研究における世界的な教育研究拠点を目指そうとする本学の将来構想の主要な推進力・両輪であると考えられています。拠点活動の開始から2年を経過し、それぞれの拠点の活動は、すでに大きな成果と波及効果を生みだしつつあります。

「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」は、「TUFS言語モジュール」と呼ばれるインターネットを活用した17言語の多言語ウェブ教材を開発していますが、これは情報工学の基盤の上に言語学と言語教育学を統合させた「言語情報学」という新しい学問領域からの研究であり、拠点形成の中心的な学術的成果です。この拠点を全学的見地から支援するために、学長直属の「21世紀COEプログラム運営室」を設置しています。この運営室は、学長、副学長、研究科長、拠点リーダーをはじめ、大学院を支える学部ならびにアジア・アフリカ言語文化研究所の長、さらに事務局長以下事務局幹部から構成され、部局横断でかつ事務局・教員が文字通り一体となった組織です。運営室は、拠点の支援のために学内諸組織間の連携体制を構築するとともに、総計300平米におよぶスペースの提供や在外調査研究旅費などの学内予算措置をはじめとする支援を行っています。

今後もさらに推進メンバーの方々が精力的にプロジェクトに取り組み、大きな研究成果をあげ、言語情報学拠点から次世代のわが国の言語研究と外国語教育を担う人材が多数輩出されることを願ってやみません。21世紀COEプログラムの成功のために、本学の叡智を結集し、大学全体として協力してゆく所存です。

2004年6月10日

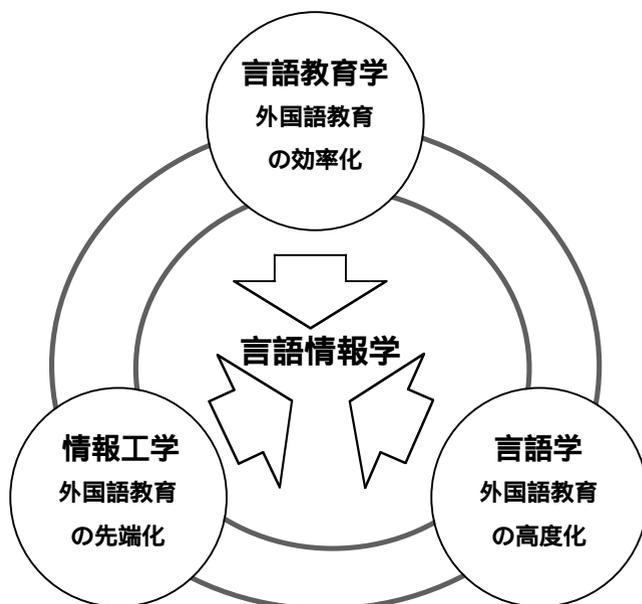
言語運用を基盤とする言語情報学拠点 Center of Usage-Based Linguistic Informatics (UBLI)

川口裕司 (COE 拠点リーダー)

言語情報学

情報工学の基盤の上に言語学と言語教育学を有機的に統合し、「言語情報学」という新たな学問分野の世界的な研究拠点を創成することが、このプロジェクトの目的です。ボーダレスな多言語時代に入った現在、言語教育においても情報技術に裏づけされた多言語 e-Learning システムを構築し、高度で効率的な教育を行なうことが望まれます。

この COE 計画では、4 つの研究班が組織され、各班は緊密な連携をとりつつ研究が進められています。



研究組織



言語情報学班は言語情報学の研究全体を統括し、COE 計画において中心的な役割を担う研究班です。この班のもとに言語学班、言語教育学班、情報工学班の3つの班が形成され、個々の専門分野における研究のほかに、言語情報学的研究を推進するための基礎研究を行なっています。

研究組織の全体を統括するのは、21 世紀 COE の事業推進担当者のうちの7名からなる統括班で、年次計画の遂行に関わる重要な意思決定は統括班会議でなされます。さらに各班の連携がより緊密になるように、連絡班も設置されています。連絡

4 川口裕司 (COE 拠点リーダー)

班の会議も頻繁に開かれ、プロジェクトの進捗がお互いに報告されます。

統括班： 在間 進、高垣 敏博、敦賀 陽一郎、芝野 耕司、峰岸 真琴、
宇佐美 まゆみ、川口 裕司

連絡班： 浦田 和幸、黒澤 直俊、海野 多枝、吉富 朝子、佐野 洋、
林 俊成

冒頭にも述べたように、この COE 計画によって創成される新たな学問分野である言語情報学は、情報工学の基盤の上に言語学と言語教育学を統合した学問分野です。言語情報学の最も目にみえる成果は、17 の言語を対象とするインターネット上の言語学習システム、「TUFS 言語モジュール」です。

TUFS 言語モジュール (TUFS Language Modules)



<http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/index.html>

TUFS 言語モジュールは 2003 年 4 月 25 日に内部公開が始まり、字句の修正や誤

植の訂正が行なわれました。まず最初に外部公開されたのは、IPA (International Phonetic Alphabet、国際音声字母) モジュールです。続いて公開されたのが発音モジュールで、2003年9月に一挙に、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、ロシア語、中国語、朝鮮語、モンゴル語、フィリピン語、ベトナム語、日本語の11言語が公開されました。

そして2003年12月12日に、後で述べます国際会議の開催に合わせて、会話モジュールが17の全ての言語で公開されました。

TUFS 言語モジュールの17言語

英語 ドイツ語 フランス語 スペイン語 ポルトガル語 ロシア語		中国語 朝鮮語 モンゴル語 インドネシア語 フィリピン語 ラオス語 カンボジア語 ベトナム語 日本語
アラビア語、トルコ語		

モジュールと通言語的発想

TUFS 言語モジュールは今までにない新しいタイプのウェブ教材です。その名のとおり、「モジュール的発想」に基づいて作られています。TUFS 言語モジュールでは、言語学習は発音、会話、文法、語彙の4つのモジュールに分解され、それぞれのモジュールはある程度まで互いに独立しながら、全体として一つのまとまりをもった言語学習教材を構成すると考えます。もちろん言語学習が一つの統合された一体性のある営みであることは言うまでもありません。しかしモジュール化によって、「どのモジュールからでも」自由に好きなところから言語学習を始めることができることは、少なくともデメリットではありません。それどころか改訂や修正が容易なことはモジュール教材のメリットと言えるでしょう。

ところでTUFS 言語モジュールにより、より自由な学習設計が可能になるわけですが、学習の達成度や到達度を知るには、やはり何らかの統一的な物差しが必要になります。このCOE計画では、さらに一歩進んで、TUFS 言語モジュールを用いた、東京外国語大学独自の言語能力記述モデルを追求し、将来的に一つの統一モデルを提案する予定です。17の言語にわたって、ある程度まで共通に言語能力を記述することが可能になれば、中等・高等教育における言語教育に一時代を画することになるでしょう。ヨーロッパやアメリカではこれまで多言語に共通の言語能力記

述の研究が地道に行なわれてきているだけに、日本でも同様の取組みに、今、着手することは大変重要だと思います。

多言語による双方向モジュール

一つの同じ教材をいろいろな言語で学ぶことができたらどうでしょうか。それを実現しようというのが TUFUS 言語モジュールの多言語版です。今のところ、英語とモンゴル語と中国語（繁体字）のわかる人が、日本語の発音モジュールと会話モジュールを学習できるようになっています。今後もさらにモジュールの多言語化を推し進めていきます。

インターネット上の素材は取りかえがとても簡単です。TUFUS 言語モジュールも同じです。まず言語素材が作成され、次にそれがウェブ化されます。そして実際に教材が使用され、評価が戻ってくると、もとの言語素材に修正や改訂が加えられ、新たなモジュール教材として生まれかわります。

第 1 回言語情報学国際会議

21 世紀 COE が採択されるとすぐに、国際会議の準備が進められました。2002 年末に会議の輪郭を決定しました。こうして 2003 年 12 月 13・14 日の両日に、東京外国語大学で第 1 回言語情報学国際会議 (The First International Conference On Linguistic Informatics) が開催されました。

従来から言語理論とコンピュータ科学が言語教育や言語習得に影響を与えてきたことは周知のことです。しかしながら、これら三つの研究領域の統合と協働は必ずしも行われてきていません。この COE 計画が目指すのはそれらの学問領域の有機的な統合です。

言語情報学の創成により、従来の言語学と応用言語学の成果は情報工学の基盤の上に統合されます。この国際会議では言語情報学という新しい統合的学問領域の現状を認識し、将来の可能性を考えます。会議は三つのセッションからなります。

1. コンピュータ言語学・・・コンピュータ科学と言語学の協働の可能性
2. コーパス言語学・・・コーパス言語学の現状
3. 応用言語学・・・第二言語習得と言語理論との関連性

会議には海外や国内の研究機関より多数の研究者をお招きし、2 日間で延べ 300 名の出席者があり、活発な議論が交わされました。本学からも教員と大学院生が多数の報告を行いました。言語情報学という統合的学問分野は、コンピュータ言語学、文献学、方言学、コーパス言語学、語用論、応用言語学、e-Learning などの多岐にわたる研究分野と関連します。そのため会議の参加者がそれぞれの報告や議論の内容を理解できるように、事前に予稿集を出版して会議に臨みました。この会議報告集を通して、言語情報学の裾野の広さを認識するとともに、その現状と課題が明らかになることと思います。